



新企画!!! 第五弾!!!
『広島之星』

vol.1

広報部

<趣旨>

公益社団法人を目指す広島県柔道接骨師会として、地元広島でご活躍していらっしゃる個人・団体を業界誌「柔接ひろしま」で紹介し、接・整骨院業界でさまざまな応援活動しながら地元広島のスポートや文化を盛り上げていく役割を担おう! ということで新企画スタートです!!!



広島柔道接骨師会の広報部長の宮迫です。宮迫にとりまして小田監督はインタビューを行うまで直接の面識はありませんでしたが、広島商業野球部の大先輩でありまして、野球部的には「畏れ多い」方であります。

このあと小田監督のインタビューをお届けしますが、私は小田監督のお話を聞いて「静かなる闘将」「知的なりアリスト」などのキャッチフレーズが思い浮かびました。お読みくださるあなたであれば、小田監督にどのようなキャッチフレーズをつけるでしょうか。そんなことも

第一回目のゲストは、「広島県立総合技術高等学校硬式野球部 小田浩監督」です。

今回お迎えするゲストは、私立高校の強豪校がひしめく広島県の高校野球において環境が制限される公立高校に身を置きながら、甲子園出場を果たすなど高校野球界に一石を投じている広島県立総合技術高等学校硬式野球部の小田浩監督を紹介します。

「小田監督」という名前を聞いてピンときた方は高校野球通と言えるのかもしれません。しかし、「小田監督」を知らずして広島県の高校野球を語るなかれ。そういう人物であることが今回のインタビューを読むとご理解いただけると思います。また、高校野球が主たるテーマとなっていますが、小田監督の稀有な思考が期せずして「人材論」「組織論」にまで展開され、経営論としても十分参考になる内容であると自負しております。

インタビュアーを務めさせていただくのは、

【プレイバック】

1982年(昭和57年)

第64回全国高等学校野球選手権大会決勝

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	R
池田	6	0	0	0	1	5	0	0	0	12
広島商	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2

決勝戦は、力の池田と技の広島商とまったく対照的な両チームの顔合わせ。相手はのちに鳴り物入りでプロ野球に入団した畠山選手、水野選手などを個性あふれる選手を見事に統率した故郷文也監督率いる金属バットの申し子「やまびこ打線池田」でした。思わぬ大差がついてしまいました。改めて広島野球の存在感、名門復活を全国に示す大会となりました。ちなみに広島商はこの年の秋の国体では池田高校に3-1と雪辱して優勝しました。

考えながら読んでいただけると幸いです。

小田監督の経歴を簡単にご紹介すると、現在、広島県立総合技術高校の野球部で監督を務める小田浩監督は広島商業高校時代に選手として夏の甲子園に出場し準優勝。その当時の広島商業の監督がくしくも2009年8月に27年ぶりに広島商業野球部監督に復帰した桑原秀範監督でした。広島商が準優勝したときの決勝戦は覚えていらっしゃる方も多いのではないのでしょうか。そうです、決勝戦は「攻めダルマ」の異名をとった葛原監督率いる徳島県の池田高校でした。

小田監督は高校卒業後、順天堂大学に進学、野球部の主将を務め、在籍時は順天堂大学のこれまでの大学最高順位を記録するなど活躍しました。その後、教員免許を取得し教員として最初の赴任先、公立高校の広島県立西条農業高等学校で野球部監督に就任しました。

小田監督は監督就任3年目(1991年)には早々と監督としても、また西条農業にとっても初出場となる甲子園の土を踏み、2年後の1993年にも再び西条農業を夏の甲子園大会に導きました。以後、一貫して公立高校を舞台に進学校として知られる広島県立海田高等学校の野球部監督に、2005年には現在も監督を務める広島県立総合技術高等学校に転任し、野球部監督として現在に至っています。

その総合技術高校は2010年の広島県秋季県大会を3位で通過し中国大会に出場。中国大会では優勝した関西高校(岡山)に準決勝で0-1と惜敗するものの、今春2011年の選抜甲子園大会への出場が有力視されております。

甲子園出場校の発表は2011年1月28日ですから「柔接ひろしま」発刊と同時期となります。この冊子がお手元に届く時に吉報が届くことを祈りつつ・・・

【プレイバック】

1982年(昭和57年)

第64回全国高等学校野球選手権大会

広島商の決勝戦までの戦い

広島商	6-2	銚田一	
広島商	4-2	興南	
準々決勝	広島商	5-2	比叡山
準決勝	広島商	1-0	中京

桑原監督率いる広島商は、好投手の下馬評高かった銚田一の関投手、興南の仲田投手を攻略し、見事勝利。準決勝では重い速球が持ち味の当時の高校最高級・野中投手を中心に投打にまとまる中京が有利との下馬評を覆し広島商のサイドスロー・エースの池本投手が粘り強いピッチングを見せ、スクイズであげた虎の子の1点を守り抜いて「元祖広島野球」で勝利しました。

この大会で活躍のちにプロ野球に入団した主な選手たち

一部を列挙しましたが、第64回全国高等学校野球選手権大会は、錚々たるメンバーが集結していたことがよくわかります。

- 阿井英二郎(東農大二)
- 荒木 大輔(早稲田実)
- 石井 丈裕(早稲田実)
- 野中 徹博(中京)
- 紀藤 真琴(中京)
- 前田 耕司(福井)
- 植田 幸弘(南部)
- 秋村 謙宏(宇部商)
- 畠山 準(池田)
- 水野 雄仁(池田)
- 新谷 博(佐賀商)
- 香田 勲男(佐世保工)
- 宮里 太(都城)
- 仲田 幸司(興南)
- 仲田 秀司(興南)

宮迫 いろいろとお聞きしたいことはあるのですが、まずは先日行われた秋季県大会と中国大会についてお聞きかせいただきます。

もちろん県大会、中国大会とも優勝を目指して戦ってこられたと思うのですが今回の結果について小田監督の総括をお聞かせください。

小田監督 そうですね、そんなに力のあるチームだとは思っていないので「やれるだけのことはやった」というのが本当のところですかね。

宮迫 中国大会の準決勝の関西高校(岡山県)戦、0-1の惜敗だったわけですが、もう少しこういう戦いをすればよかったとか、そういう

ことはないですか？

小田監督 それはないですね。展開次第では大差で負けてしまうこともあるのではないかと戦前には思っていましたから。1年生投手が広島県大会を通して、徐々に良くなってきましたが、その良さが本物かどうか半信半疑の状態で中国大会に臨みました。背番号も11で、この秋から本格的に投げ始めたわけでどれくらいやれるのが本当にわからない状態での戦いでした。

そうしたことから投手の出来次第では、大敗もありえるのではないかと思っていました。投手がこれだけの仕事はいつもきちんとしてくれるという確信ではなく、怖々と戦っていたというのが本音です。幸い、中国大会の初戦から準決勝まで投手がとてもいい状態で投げたお陰で接戦に持ち込めたわけです。総括として最初に「やれるだけのことはやった」というのはそういう意味です。

宮迫 私も総合技術高校の県大会の試合を拝見し、中国大会の準決勝の関西戦は雨天順延になったため、テレビ観戦となりましたが、1年生投手の急成長ぶりには驚かされました。県大会の初戦と中国大会の準決勝とはまるで別人が投げている感じさえしました。高校生が短期間に大きく成長する、そういうことが高校生には起こり得るんだという可能性を見せていただきました。

【取材メモ】

今回の取材で初めて小田監督とお話をさせていただきました。お話をする前は、「広島野球の申し子」で「闘将・猛将・小田監督」ということを勝手なイメージが膨らんでいました。ですから、今回の中国大会の準決勝での敗退を受けて監督は「悔しくて残念でたまらない」「くそー」と感じていたのではないかと印象を持っていましたが、お話をさせていただき、自分のチームを非常に冷静に分析しておられると感じました。

インタビュー前に「最初の一言」をどうしようか迷っていたのですが、この時点で、どう言っていかが悟りました。

中国大会3位、おめでとうございます。

強さの秘訣・野球の原点・信条について

宮迫 今回の中国大会の3位ということはもちろんですが、略歴でも少し紹介はさせていただきましたが、これまで小田監督が赴任した公立高校が常に「強豪校」になっていきます。

野球は私立高校全盛時代。甲子園常連校はもとより、広島県内の強豪校と言われるほとんどの高校は有望中学生選手を集めたり、声をかけたりして選手の取り合いまで起こっているという話も聞いています。

そんな中で赴任する公立校で特別な選手集めもせず、寮や下宿生をもたず、近隣の自宅から通学する選手たちだけを率いてのこの躍進ぶりは以前からとても気になっておりました。

最初に赴任された県立西条農業は小田監督が赴任して初めて甲子園に出場しました。また、海田高等学校は進学校です。甲子園出場はなりませんでしたが、広島県大会ではダークホース的な存在になるまで鍛え上げられました。そして、野球部もあるのかないのかわからない新設校だった総合技術高校。

今の時点ではこれまでの積み重ねてきた実績、また小田監督を慕って選手が集ってきていることと思います。ただ、先ほども申しましたが総合技術高校には寮もなく、遠方から特別な選手集めをしているわけでもない。また公立高校という制約が多い状況下でのこれまでの躍進には「何かがある」と思います。自分で自分のことを語ることは難しいかもしれませんが、小田監督が率いる「チームが強くなっていく秘訣」というものがあれば語っていただけませんか。

「やめる勇気」

小田監督 そうですね、自分で自分のことを語るということは難しいですが、あえて言うのなら「物事を客観的にみることができないか」と思います。

事実を的確に把握して、分析、実践。できることと、できないことを選別して行う。どんな世界でもそうかもしれませんが経済的に言うと「費用対効果」を追い求めているということになりますかね。これだけのことをして、どれく

らいの効果が得られるのかを客観的に分析する。

通常、高校野球の監督はたいてい「教えたがり」で「教えたがり」が多いように思います。私はそれを「教えたらできるようになる」という「思い込み」と思っていますが、「教えたがり」は言葉が悪いですが、麻薬に近いものがある、それを始めるとやめられなくなると思います。

私にはそれがありません。「できないことはできない」と常に費用対効果を考えます。考えてみてください。高校生の野球生活は2年3カ月しかないのです。その短い高校野球生活で、なおかつ公立高校での練習環境、入学してくる生徒のことを考えたら、おのずとすることが決まってくる。仮に高校野球生活が10年間あるのなら、今のやり方を変えますが、実際には高校生には2年3カ月しかないですからね。

だから、入学してきた生徒を見て決めます。この選手たちにはどこまでの費用対効果があるか。

突き詰める練習をやったほうがいいのか、やらないほうがいいのかと問われれば、当然やったほうが良いに決まっています。が、私には、それを「やめる勇気」があります。口はばったいい言いかたですが、費用対効果が高いと思われる練習から優先的に見極めて手をつける。それがたとえ邪道と言われようとする。捨てるものは捨てる。指導者としては、とても勇気のいることですが、それができない指導者のほうが多いのではないのでしょうか。普通はやりたいことを全部やりたがる。けど、私は思い切って「やめる勇気」があります。

秘訣といえるかどうかは別にして、他の監督さんと違う部分といえば、そういうことではないかと思えます。

周りからよくいわれることがあります。西条農業なら西条農業で、海田なら海田の、総合技術では総合技術という違う学校で違う野球を、赴任した高校に合わせて野球をしている。ただ、そうではないのです。私の中では一緒なのです。極めて単純でシンプルなのです。私の中で「ひとつ」のものがあって、それはどこの高校に行こうか一緒なのです。

シンプルというのは、すごく単純明快で、「投手だったら力強い球を真ん中に投げる」「打者

だったら強いスイングができるようにする」これだけなのです。また、それができるようになるために、それを一番効率の良い方法で行う。そのことしか考えていませんし、それを割り切っています。

【プレイバック】

平成3年(1991年)

第73回全国高等学校野球選手権大会

大学卒業後、初めて赴任したのが広島県立西条農業高等学校。西条農業で野球部監督に就任した小田監督は就任3年目の1991年、監督として初めて甲子園へ。西条農業が初めて甲子園出場を果たした第73回全国高等学校野球選手権大会は、大阪桐蔭が和田、背尾両投手、萩原選手を擁し沖縄水産を決勝で下した大会です。西条農業は磯部公一選手(元・楽天イーグルス)がいたことで知られています。

戦績

西条農 4x-3 東北

我孫子 6-3 西条農

2年後の1993年、再び西条農業は夏の甲子園大会第75回全国高等学校野球選手権大会にも出場しました。

戦績

堀越 1-0 西条農

そうすることで、イライラすることがないと言ったら嘘になります。自分が経験してきたような緻密で正確な野球があることは理解はしていて、それも知っていますが、それを今の状況下できちんと教えることは自分の力ではできないと思っています。

もちろんこの部分は絶対に譲れないというところはあります。しかし、私の思っていること、考えていることのすべてを生徒たちに教えようとはしていません。最低限の譲れない部分は別にして、できることを効率的にということで取り組んでいます。

海田高校のときで言いますと、海田高校には定時制がありました。だから練習時間が17時30分までと決まっていた。

宮迫 それはまたかなり時間的な制約が大きいですね。

何の練習をやめるか

小田監督 そう。毎日の練習時間が1時間30分しかない。でも、制約があるなら制約があるで与えられた条件の中で考える。海田高校では「なにを練習するか」ではなく、「何の練習をやめるか」を考えていました。それで実際にアップをする時間がないのなら「アップをやめる」ということもやってきました。

宮迫 普通だったら、何を練習しようかと考えますが、そうではないのですね。

小田監督 そうそう、「何をやめるか」を考えていました。サインプレーとかそういう練習に毎日何時間もかけて練習なんて現実的にはできないわけです。だから、1年間試合をして1回あるかないかというプレーの練習に時間を費やすことができませんでした。

もちろん、わたしも現役時代は広商でそういう野球、練習をやってきたわけで、そういうものを本当は突き詰めたという気持ちはありますし、その練習の価値もわかっているつもりです。また、そうした練習をすることで野球のレベルが向上し、そういう野球を目指すことによる波及効果があるということもわかっています。ただ、それがわかった上で、物理的な時間の制約があるなら、1年に一回あるかないかのプレーの練習はしなくていい。こう考えるわけです。もし、仮にそのことが原因で夏の県大会の予選に出て負けてしまうという結果になったとすれば、「すいませんでした」という、諦めというか、割り切りを持っています。そういう練習をしていて、実際に細かい野球になり、細かい勝負になったとき、それで負けてしまえば、それは仕方がない。

今の総合技術高校でも練習時間が限られてくるので守備のサインプレーなどは、あまり練習をしません。思うに総合技術高校が守備のサインプレーなどを少し練習したからといって広陵や広商がそのサインプレーにひっかかってくれるとは到底思えないのです。逆の言いかたをすれば、そういうプレーにひっかかってくれる相

手には、そういうサインプレーを使わなくても勝てる相手ではないかと思っています。

最近は中学校などでもいろいろな守備のサインプレーなども練習をしていますので、そういう練習を私がしないと最初は選手も戸惑いますが、私にはそういう思いがあるのです。決して守備のサインプレーなどを否定しているのではないですが、費用対効果を考えると、総合技術高校がそうした練習に毎日大量の時間を割くのはどうなのかな？という考え方ですね。そういった野球がある、そういったプレーがあるということを知っておくことは大事ですし大切なことだとは思っていますよ。ですが、それをわかった上で、うちは違う道を歩もうということなのです。

本来なら1年かけて基礎的なことをして、そして、それができるようになって、より実践的なことに入っていくということも必要なかもしれないけど、残念ながら私達には先ほど言ったようにそういう時間もありません。そんな中で結果を出すことも大事なことです。その結果を出すために今の練習時間の十分な確保、選手の確保が物理的にできない状況で勝つためにはどうしようかを考えたらこういう方法になっていました。

2007年と2008年の夏の県大会予選、2年連続で広陵に決勝で負けたのを知っていますよね？

多くの方からそういう「細かい部分、細かい野球ができてないから負けた」と言われました。そのとき自分でも試合を分析してみました。言われような「細かい野球ができていたら」と仮定して考えてみたんです。私の結論は、決勝では確かに敗退をしましたが、「細かい部分、細かい野球」を普段から目指してやっていたら、実は決勝戦にも進めていなかったのではないかと。

「もっと突き詰めて、きちんとした野球をしないと勝てないぞ！」という助言をいただくことがあります。言われるアドバイスの意味は十分に理解していますが、でも、そんなことをしていたら創部2年や3年で公立高校が決勝戦には行けないと思うわけです。割り切ってやっていく。選手にそれを納得させる。それがとても大切なように思っています。

【プレイバック】

総合技術高校赴任3年目の2007年夏 広島県予選大会決勝 総合技術vs広陵

2007年の夏の甲子園大会で広陵高校は準優勝しました。決勝の相手は佐賀北高校といえど記憶かもしれません。8回まで5点リードで向かえ、ほぼ優勝を手中に収めていた広陵ですが、まさかの逆転負けをした、あの決勝です。

この夏、全国準優勝した広陵がもっとも苦戦した一戦が広島大会決勝の総合技術戦だともいえます。

広島県予選大会決勝、総合技術は3回に2点を先行されるも、すぐに逆転。しかし、5回に追いつかれ、試合は延長戦へ。延長11回広陵に痛恨の本塁打を打たれる。総合技術は主力の多くが2年生でした。

翌2008年、同じく総合技術vs広陵で争われた広島県予選大会決勝戦。5回まで9-2と7点リードしていた総合技術。しかし、6回に7点を奪われ同点。結局、10-12で再び決勝戦で広陵高校に惜敗したのです。

いいものを作るのではなく、売れるものを作る！

宮迫 今でも練習時間は短いですね？

小田監督 短いですよ。練習については、こんなことを思っています。

1. 練習は短い時間で効率よくではなく、「短い時間で効率悪く」
2. どっしり構えてシンプルに原因療法を
3. 少々のことには目をつむる
4. 個々の能力を上げれば、解決することも多し
5. 練習に効率は求めていない

高校野球の監督をする場合、わたしは、商売人のような感覚が必要ではないかとも思います。『いいものを作るのではなく、売れるものを作る！』高校野球の監督というのは職人気質の方が多くのように思います。「いいものを作りたい」「納得のいくものを作りたい」もちろん、わたしにもそういう感覚はあります。ただ、例えば、私学で好きな選手を集めて、十分に与えられた環境

があるのであれば話は別なのかもしれませんが、繰り返しますが現実にはそうではありません。だとしたら、「ニーズにあわせて商品を作る」感覚、「理想を追い求める、いいものを作る」ではなく、その高校にあった商品、ニーズにマッチした商品を作る感覚ということが必要ではないかと思っています。

宮迫 就任当初からそういう感覚だったのですか？

小田監督 初めて赴任した西条農業の監督に就任当初は、広商野球を追いかけていました。私の習った広商野球というのを一言でいえば「1-0」で勝てるチームということになります。「1-0」で勝てるチームが強いチームだと教えられました。西条農業では最初その広商野球のコピーをしていました。ただ、2年続けて失敗しました。自分ではできていたと思っていたけど、そうではなかったようです。

当時の選手たちの「価値観」が違っていました。たとえば、当時指導していた高校生は、10-3で勝ったら、7点差もつけて勝ったわけだから、そのほうが「強い」という価値観をもっていました。そんな価値観が違う選手たちに「1-0」で勝てるチーム作りを当時の環境のまま、与えられた2年3カ月間で教えきる、その上で価値観を変化させるということは、自分の力では難しいと感じました。

また、西条農業監督就任1年目は確か3回戦くらいで負けたのですが、そのときは「選手のせい」にしてしまいました。「今年は選手がいなかったから負けたんだ」と。そして、向かえた2年目、自信をもって挑んだ夏の大会でした。1年目同様、「1-0」で勝つチームを目指してやってきましたが、1回戦で呉港高校に14-15で負けてしまいました。「1-0」で勝つチーム作りをして「14-15」で1回戦で負けたのです。14点取って負けた現実。15点取られて負けた現実。

このときは1年目と違い、選手たちのせいではなく、監督のせいで負けたと実感しました。その2年間の貴重な体験を経て、「これじゃあいけない！」と思いました。ここが監督生活の「ひとつの転機」でした。

転機

「1-0」で勝つ野球ではなく「10-3」で勝つ野球に納得したわけではないですが、選手たちの考える価値観を受け入れるようになりました。逆に言ったら「9点取られたら10点取ればいいじゃん」と思うようになりました。何度も言いますが、納得はしていないのですが、2年間やってきた結果が今言ったような結果だったので自分が変わらないといけな思いました。「今までと違う方法を模索してみよう」と。それも中途半端にしても駄目だ。もし、やって駄目だったら「監督を辞めてもいいや」という覚悟ができた瞬間でした。

そして、方法を変えた翌年、甲子園に出場することができました。選手たちの納得の気持ちがあったことが甲子園出場という結果に結び付いたのではないかと思います。私自身が広商でやっていたこととは違う価値観や喜びをもった選手たちが、その自分たちの価値観にプライドをもって臨んでいました。

自分には広商の血が流れているけど、その転機を経て「やり方」はいろいろあるのではないかなと思えるようになりました。また、甲子園出場という結果が出たこともあり、広商のように伝統のあるチームでもなかったの、「自分の色」というものが出せました。結果的には「自分の色」を出せたことで結果もついてきたのではないかなと思います。私の監督生活の「転機」「原点」はそこにあったと思います。

【取材メモ】

昭和57年夏の甲子園準優勝した桑原秀範監督vs広商生

小田監督に広商選手時代の監督で恩師でもある桑原監督について聞いたところ、「当時は超越していた。なにかもが超越していた。それ以後の選手たちには想像がつかないと思う。到底わからないと思う。それくらい・・・超越していた。」と語ってくれました。

私も広商野球部の厳しさを身をもって体験していたと思っていますが、小田監督は「そんなものじゃないよ。もう、ホント、超越、超越。」と。

小田監督の「超越超越」という言葉に未恐ろしい光景がなんとなくだけ想像できました。また、自分が体験した広商（それでも相当に厳しい苛酷な高校生活ではあったのですが）は序の口であったのかと改めて身が引き締まりました。

いいものを作っても、売れないと駄目だ！

こうした転機をきっかけに「これをやったら勝てる」「広商野球をして勝つ」でもなく、目の前にいる生徒たちを勝たせるためには「どういう方法があるか？」を考えるようになりました。そして、その方法が「これしかない」と思ったら、それが邪道と呼ばれようが、邪道で臨もうと思えるようになったのです。精神的なものや広商野球を否定しているわけではありません。「最後は根性よ」という面もやはりあります。しかし、数字や客観的なデータを重視して突き詰めて、情報戦略を立て、「勝つためには？」を最大限考えて自分流で突き進む。いくら良いものを作っても売れないと駄目だと。

いくら良い技術を持っていてもお客さんがきてくれないと意味ないでしょう？ それは接骨院業界でも一緒じゃないですか？いくら腕が良くても患者さんが誰も来なかったら駄目でしょ？ニーズに応えるというか、患者さんが求めていることをしていかないといけなこともあるのではないですか？

接骨院でいえば、正確な治療ということは大前提としてあるでしょうが、「大丈夫ですよ」という一言で患者さんが元気になることもあるでしょう？正確な治療がなくて「大丈夫ですよ」の一点張りでは絶対に駄目ですけどね。

宮迫 そこが今日一番お聞きしたかったことなんです。私が今まで見ていた限りの印象なのですが、「西条農業高校方式」「海田高校方式」「総合技術高校方式」というのがあって選手達を指導しているのかなと思っていましたがそうではないのですね。

小田監督 それは周りからよく言われますが、自分の中ではなにも変わってないですよ。この選手たちで、この環境で、どうやったら結果が

でるかなと思ってやっています。費用対効果を考えて。「1-0」で勝つ野球は到底できないのです。練習時間も少ない、環境も整っていない、また進学校という制約のある海田高校の場合、普通の監督だったら、投手を作って、守りを固めて、点をやらない野球を目指したりするのかもしれませんが、私はてっとり早く「パワーをつけてやるしかないの」と思って指導しました。

高校野球の常識

小田監督 「高校野球の常識」ってあると思うんだけど、それを「誰かが証明したの？」と思うわけです。私はよくバントをしないとと言われるけど、私は実際ストップウォッチを持って相手投手のクイックモーションをみて、投球動作に何秒かかる、ランナーの選手は塁間を何秒で走れる。だったら間違いなく盗塁ができる。そうわかったら、バントなんてさせず、盗塁をさせます。アウトになりようがないのなら、当たり前ですが盗塁です。試合中「アウトにならないじゃろ」ではなく、「絶対にアウトにならない」と確信をもってする盗塁があります。

「無死1塁＝バント」といういわゆる「高校野球の常識」というか「野球の常識」も、そういうところから考えると違うのではないかなと思います。もちろん、これだったら微妙なタイミングだなという秒数の場合もあります。私は盗塁ひとつをとっても、客観的なデータに置き換えて選手たちに伝えます。「高校野球の常識」というものはあるのかもしれませんが、それにとられることはありません。盗塁で考えても、そうやって一つひとつクリアにしてできるようになったら、選手たちも自信が付き変わってくる。そういう意味では総合技術でも、西条農業でも海田でも同じように単純明快、シンプルにやっています。

単純明快、シンプルに

宮迫 単純明快、シンプルですか？

小田監督 そうです。強いボールを真ん中に投げる。バットを強く振る。野球におけるその単純明快な部分は私自身も言い訳をせず、また選手にも決して言い訳をさせません。西条農業だから、海田だから、総合技術だからできないと

決めつけない。「できる」「できるんだ」ということを選手たちに納得させてやらせています。

例えばピッチャーに「何で打たれたんや？」と質問すれば、「コースが甘くなりました」と言う。「甘いところに入って打たれました」と。10人に質問したら10人がそう答えます。それに対して私が返す言葉は「甘くなるたびに打たれていたら、みな打たれるよ。甘くなってもいいんよ。真ん中いっても打たれない球を投げろ！」と。

キャッチャーに「何で打たれたんや？」と質問すれば、「配球を間違えました」と答えます。「じゃあ正しい配球ってなんなんや？」と質問する。でも答えられません。「正しい配球」なんてないと思うのです。もちろん展開の中で考えないといけな配球というのはありますが、普通に言うセオリー、「野球の常識」として信じられているものには特に高校野球では当てはまらないことが多いですね。

【取材メモ】

監督に初めて就任した最初の2年間で得たものを活かすとともに年齢を重ねて考え方も変化してきたと語る小田監督。野球の醍醐味でもある「強いボールを投げる」「バットを強く振る」という単純明快な基本の部分は譲れないと繰り返し話してくださいました。

小田監督は「力がないとどうにもならないのです」とも。「広陵や広商相手にいくら戦術や戦略と言っても上からガツン！とやられれば、終わりじゃないですか。ならば、その部分で互角とまではいかないまでも、その部分の差をある程度詰めていくことが大事じゃないかと思うのです。」

この野球の基本を大事にする。ある意味では広商野球とは対極の面を強調されるのは、もしかしたら小田監督の広商選手時代の夏の甲子園決勝戦で「パワー野球の申し子」と言われた池田高校に粉砕されたことが影響しているのではないかと取材原稿を書き起こしながら思いました。この質問はまた小田監督にお会いしたときに聞いてみたいと思います。

創部間もない公立高校が広陵と互角に戦えた訳

宮迫 2005年4月に開校した県立の総合技術高校が創部間もない2007年の夏の県大会の決勝戦まで進み、広陵高校に敗れたときのことをお聞きしたいのですが。

小田監督 あのチームはたまたまじゃなくて、そういうチーム作りをしていたのです。だから、ああいった展開（主力が2年生だった総合技術は3回に2点を先行されるもすぐに逆転したが5回に追いつかれ試合は延長戦へ。延長11回広陵に痛恨の本塁打を打たれ敗れた）になるチームで、ああいった要素もあったチームでもあったわけです。たまたま決勝に行ったわけではなく、そういうチーム作りをしたのです。最初からそういうチーム作りをしなかったら、創部2年目、2年生主体のチームでああいった試合展開には持ち込めてなかったと思います。

宮迫 なるほど。これまでのお話が今の話でよく理解できてきました。そういうチーム作りをしていなかったら、創部2年目では決勝までたどりつけてないということなのですね。

小田監督 私のやっていることは単純明快な発想なんです。今年2010年のチームは身体が小さいが足の速い選手が多いから、周りの人は去年とは違う毛色のチームだ。「総合技術の野球が変わった」と、言われることがあります。私の中ではチーム作りは何も変わってないんですよ。基本的にはまったく一緒なんです。小さくても、バンバンバットは振りますしね。ただ、年によって、いる選手によって、基本で単純明快な面にプラス α でできることがあると今年のようなチームになるというだけです。たまたま今年はそういうことができるというだけで、基本はなにも変わっていない。練習の方法もやり方を変えているわけではないです。今年を守る野球をするとか、攻撃野球をするとか、そういうことではないんです。今までと同じで、ただ、今年は「こういうこともできる」というプラス α があるということですね。

第83回センバツ高校野球：21世紀枠候補、総合技術を推薦

広島県高野連は来春2011年の第83回選抜高校野球大会の21世紀枠候補に総合技術（三原市）を推薦すると発表した。同校は2004年開校で生徒数705人。野球部は翌2005年に創部され部員数81人。多数のクラブとグラウンドを共有し、工業科所属の部員は資格試験取得のための補習などで練習時間がそろわないが、工夫して実力を付けてきた。創部3年目で夏の広島大会準優勝、翌年も準優勝。今年10月の秋季中国地区大会は3位だったが強豪・広陵を破るなど実力校の一つとして定着している。

小田浩監督は「日ごろの努力が評価され、感謝の気持ちでいっぱい。責任の重さを痛感している。やれることをやった上で、その日を迎えたい」と抱負を語った。今後、中国地区で1校に絞られ、来年1月に全国各地の候補校から出場3校が決まる。

練習を見に来た人からは「なんやこれ！」と思われる

宮迫 基本になる部分は一緒で、あとはプラス α があるかどうかが違うだけということですね。今年は選手がいるからプラス α があると。

小田監督 そうです。ただ、そういう選手がいないからと言って変わることはないです。いなくても、やることは同じですよ。選手がいようが、いまいが、やることは変わらない。最初から「この選手がいるからこうしよう」ということではなくて、プラス α があるかないかだけです。県内のどのチームとやっても互角にわたりあえるチーム作り。意外かもしれませんが、私の頭の中に甲子園で戦うイメージではないんです。

宮迫 それは意外ですね。

小田監督 選手たちには今だと「広陵や広商、如水館と互角にできるようになろう！」と伝え、それを目指し、それができるようになったら、次は「勝つためにはどうしたらいいか？」を考

えます。「勝つためにはどうしたらいいの？」というところまで、たどり着かないこともありますけど。ただそれは割り切りですね。まっ、そうするしかないんですけどね。(苦笑)

宮迫 意外ですが、大変に貴重なお話です。

小田監督 周りの人たちには評価していただくことも多々ありますが、やっていることは恥ずかしいような・・・。野球をしている人や野球をかじっている人たちがうちに練習を見に来ていた。だと「なんやこれ！」とか思われるわけです。プロの目で見たり、レベルの高い人たちから見ると「なにしょーるんや！」という練習に見えるかもしれませんが、皆さんには「公立高校の高校生」という感覚がないんですよ。

宮迫 そこが抜け落ちているんですね。

一番大事な部分が抜け落ちてる

小田監督 そうそう、一番大事な部分が抜け落ちているんですよ。(笑)

私はこの公立高校の高校生にとって「ベストなものはなんなのか？」を考えています。目の前にいる高校生に対して「ベストなものはなになのか？」という部分が高校生の指導者にあまりないように思います。自分のやってきた野球とか自分が目指している野球、理想の野球をやりたがる傾向があるように思えます。

私はそうすることが、良いか悪いかは別にして、そこの部分の割り切りがあるということになりますね。言葉を変えれば「現実的な選択をする」ということになりますかね。

ただこれまで、こうしてやってきてある程度の結果がでているので、大きく間違っていないのではないかとはいっています。足りないところははあるとは思いますが、大筋間違っていない。

宮迫 小田監督も広商で野球をされ、また、現役時代は甲子園準優勝というご経験もされているわけですから、もちろん自分の野球像とか野球観というものはあるのですが、そういう理想像とかを選手達に押し付けるのではなく、

現実に即応した「割り切り」をもっていらっしゃるのですね。

小田監督 そこが他の監督さんとは違うかな。でも、それがないと新設校ではやっていけないですよ。指導者というのは、そういう部分に一番目を向けないといけないと思うけど、なかなかわかっていても、できないというのが現実です。

宮迫 ここまで実績を築いてこられたら、小田監督の指導者としての高校野球観というものは変わらないですね。

最先端の治療機器も宝の持ち腐

小田監督 医学で言うと、最先端の治療機器があったとしても使える人がいないと宝の持ち腐れだし、最先端の治療機器で治療したいというのが本来だとは思いますが、患者さんが求めているものが先生の「大丈夫ですよ」というひと言だったら、その患者さんのためになるのは最先端の治療ではなく、「ひと言の声」のほうが大切じゃないかと思うわけです。

自分の中に理想はあっても、現実、目の前にいる2年3カ月という期間しかない高校生に理想を押し付けても、絶対に間に合わないだろうなという「割り切り」が大事だと思いますね。

言葉では説明できないことがある

小田監督 ただ、できなかったことが、他のことを積み重ねることで、できるようになっていることがあります。それは、言葉では説明できない、表せない、感覚的なところもあります。

痛いところがツバをつけたら治りましたという話があると思うんですけど、それは言葉では説明できないじゃないですか。そういう感覚的なことというのはあります。でも、秘密の練習とか特別な練習ということは一切ありません。練習のメニューとか練習内容は恥ずかしい限り。野球をしたことがある人が見たらレベルは低いと思います。ただ、こうやったら勝るとか、ベースになる根本的な部分は、対処療法的ではなく原因療法的に徹底的にやっていくということは、自分も持っているし、選手も納得しています。それが、うちの「強み」かもしれません!!!

【取材メモ】

練習試合観戦 桑原広商vs小田総合技術

取材当日はくしくも小田監督の桑原監督率いる広商との練習試合でした。

広島商業野球部は一昨年より桑原監督が27年ぶりに復帰。広商桑原監督は小田監督の広商選手時代の恩師であり師匠であり、昭和57年の夏の甲子園大会準優勝時は監督と選手という立場でした。その縁なるお二方が取材当日は監督同士で練習試合。練習試合は2試合とも総合技術が勝ちました。

小田監督は試合後「今日試合を2試合見ていただいたからおわかりだとは思いますが、総合技術は広商のような練習は全くしてないのですが、広商野球にまったく対応できないかと言えば、そんなことはなくちゃんと対応できていたでしょ?」と言われました。

確かに試合を拝見させていただいてそれは感じました。2試合とも総合技術が点差はさほどつかずに勝ったのですが、点差がつかない展開でも、総合技術が試合の支配では圧倒していたと感じました。

小田監督曰く「広商のような練習はできてないけど、広商と同じような攻撃もできるし、守備もできる。それなりに、ちゃんと対応が

できていると思います。ベース（基礎）の部分ができるようになっていたら、その上の技術的な部分は練習をしなくても、ある程度はできるようになっているんですよ。」これがインタビューで語られていた言葉では表せない感覚的なところということなのでしょう。

また、野球の基礎になる部分がちゃんとできてさえいれば、対応が可能であるという小田監督の持論が実際目の前で行われている試合で確かに証明されていたことも実感したのでした。

まさに「相手の作戦や戦略に応じて、こちらが作戦や戦略を立てても、下手だったら、どうにもならない。どうすることもできないんです。投手に配球は大事と言っても、そこへ投げられなければ意味がない。打者だと狙い球を絞ってと言っても、バットが振れないと意味がない。戦略、戦術の前に行うことができるということだと思いますね。」

限られた環境や制約の多い条件の中でも、戦い方によっては十分チャンスがあることを小田監督自身が日々生徒たちとの野球生活の中で実感しつつ、それを喜びとして成長している姿を見るのは本当にうれしい限りでした。



野球部が強くなる小田理論

小田監督 投手では速い球を投げるところからスタートする。打者だと強く振れるようになるというところからスタートする。そして、それを積み重ねていき、仕上げの段階になると、これはこうしたほうがいいのか、こうした方がいいんじゃないかなということを使う。だから守備でも捕球とか細かいところは最初からはしないんです。いくら捕球とかがうまくなって夏の大大会で荒れたグラウンドで、イレギュラーしたら終わりじゃろ? じゃあ、まずは肩を強くしろ! 肩が強ければ、ボールを落としても、ジャックルしてもなんとかなる。そのほうが大事なんじゃないかと。捕球の動きとか、フットワークということが一番ではなく、肩を強くすることが一番。それを突き詰めるためには、単純な練習になります。

宮迫 だから練習見学とかにきた人からは「なにしょーるん?」ということになるのですね。

小田監督 そうです。ただ、それで困るかと言われたら、困らない。弱いチームが負けるのは、例えば、広陵とか広商の強豪校に負けるのは、細かいプレーができないから負けるのではなく、ガツン!とやられて負けることがほとんどです。だから、単純にそういうところにターゲットを絞って練習をします。ガツン!とやられて負けることはやめにして、単純な練習で自力をつけ、運がよかったら、勝てるかもしれない。流れがこっちにきたら勝てるかもしれないということなんですよね。

だから、広商のように「この一球でバントを決めない」とか、そういう野球はしません。私達は、もちろん、最終回とか、試合展開でこの一本のバントが・・・ということはあるかもしれないけど、最初から一本のバントを決めるだけで広陵や広商、如水館には勝てないと思います。

1年生が入学してきてバントの練習ばかりして、バントができるようになりました。「じゃあ、君はどうやって、塁にでるの?」ということなんです。塁に出ることができないとバントも意味をなさないので。まずは、バットを振って、強いスイングができるようになって、それ

ができて初めてバントの練習をしたらいいのではないかと思っています。

これは、私もいろんな他校の監督さんと話をしますが、他の監督さんにはあまりないことかもしれません。それが他の監督さんと違う部分かもしれません。

広商野球部OB15人が広島県内で高校野球の監督

2010年の夏時点で広島県高野連に加盟する99校のうち、広島商出身の監督は2位の広陵の4人を大きく引き離す15人。2010年夏の広島県大会ではベスト16のうち実に7チームの監督が広島商出身でした。最年長は如水館の迫田穆成監督の71歳で、最も若いのは呉商業の荒谷忠勝監督の34歳。50代以下の12人のうち11人は教員としてグラウンドに立っています。

▲広島商出身の広島県内の高校硬式野球部監督と在籍校▼	迫田 穆成 (71)	如水 館
	【甲】広島商6	如水館7
	迫田 守昭 (65)	新 庄
	【甲】広島商2	
	桑原 秀範 (64)	広島 商
	【甲】広島商4	東京・堀越5
	大前 芳隆 (51)	祇園 北瀬
	上原 隆 (49)	黒 総合技術
	小田 浩 (46)	総合技術
	【甲】西条農2	
	沖元 茂雄 (45)	広島 工南東
	沖本 滋紀 (45)	広島 芸陽
	折田 裕之 (44)	広島 高
	【甲】広島商1	
	堀尾 和司 (43)	加計芸北
印牧 隆 (43)	呉 工	
高 英治 (41)	神 尾	
北須賀俊彰 (41)	尾 道	
松山 忠 (36)	尾 道	
荒谷 忠勝 (34)	呉 商	
※【甲】は甲子園出場時の高校と回数		

リスクマネジメント

小田監督 私は選手たちにはリスクマネジメントは説明しています。プロ野球のように140試合戦って50敗しても優勝できるのであればいいんだけど、高校野球はトーナメントの一発勝負です。1点、2点は取られてもいいけど、5点、6点と取られてはいけません。大量点をとられたら終わってしまうのが高校野球です。

そういう試合展開におけるリスクマネジメントについて選手たちに話し、選手たちはそれを理解しています。たとえば、ここで敬遠して次

で勝負するよりもランナーをためずここで勝負とかいう場面がありますよね。そんなとき私は大量失点をしない、そのチームの最大の方法を考えるわけです。今年はそういうことを選手たちが理解し、実践できるチームということはいえると思います。だから、県大会の3位決定戦の広陵戦で、あぁいった戦いができたのでは

ないかと思います。

高校野球は毎年選手が変わります、毎年毎年、単純、シンプルにチーム作りをしますがお話ししてきたように、年によってできることの範囲が違ってきます。できることの範囲が多い場合は今年のようなチームになります。

【プレイバック】

**2010年度秋季広島県高等学校野球大会
3位決定戦総合技術vs広陵**

2010年度の秋季広島県高等学校野球大会で中国大会出場を懸けた3位決定戦は9月26日に行われました。序盤3-0で総合技術がリードする展開で、5回表に広陵が2点を返し、

3-2と追撃。こう着状態が続く中、8回表に広陵が先頭打者の3塁打から犠牲フライで同点についに追いつく。そして9回の攻防。9回表を無得点で抑えた総合は、9回裏ツーアウトから劇的なサヨナラで4-3勝利をものにし、3位となり、中国大会への最後の枠を見事勝ち取りました。



小田監督 もう少しリスクマネジメントの話をするすと、例えば初回無死3塁、通常なら先制点をとられるのがイヤだから内野は前進守備をとります。これが野球のセオリーと言われていきます。しかし、私はこのチームだと「初回の1点はいいや」と前進守備をとらないことがあります。1点は仕方がない。ただし2点目は入れ

させないということですね。

それは、小田野球として決めていることではなく、いわゆる野球のセオリー、常識にとらわれることはなく、毎年選手が入れ替わりチームが変わるように、毎年戦術も違ってくるということです。それにはきちんとしたデータを収集して、一番低いリスクをとります。

また、一死3塁のケースでも前進守備をとるといって内野全員を前進守備にさせるのではなく、右打者だったら、ショートは定位置で、あとの内野が前進守備をとるということもあります。それも、なぜかというリスクを考えてのことです

ンセプトがあって試合をしているかということが大事だと思います。だから、コンセプトを大事にして、セオリーにとらわれたりすることはありません。プロ野球だったら、ランナーがでたら送りバントをすれば統計的には一番力のあるチームが優勝するのかもしれませんが。高校野球もリーグ戦だったら、そういうことをやってもいいのですが、トーナメントというのは、そうではないですから。

宮迫 その場合の判断は選手がするのですか？

小田監督 もちろん最終的な判断は私がするけど、選手たちはすべてを言わなくても、私の意図が伝わっています。同じ場面でも同じ判断ではないということですね。ケースバイケース、またその年その年のチーム事情というものはあります。だから、戦略、戦術というのは毎年変化します。ただそれは小田野球が変化しているのではなく、私は一貫して一緒なのですが、選手、チームの能力で変わるということです。

何度も言いますが、セオリーを否定しているわけでも、広商野球を否定しているわけでもありません。ただ、セオリーや広商野球を理解した上でセオリーとか王道と言われることに「疑い」をもってやっています。

宮迫 興味深いお話がたくさんうかがえました。ありがとうございます。まだまだ、お話をたくさんお聞かせ願いたいところではあります。時間がすでに1時間を超えていますし。

広商野球を超えて

宮迫 小田監督は骨の髄まで広商野球がこびりついていると思うのですが、それをベースに、小田理論と言ってもいいリスクマネジメントという考え方がスパイスとして加味されて進化しているのですね。

小田監督 そうね、そんな話をするのだったら泊まり込みできてもらわないといけなね。(笑)

小田監督 もちろんわたしも広商野球というのが頭にはあります。また、セオリーということは十二分に理解をしていますが、さきほども言いましたが、高校野球は得てしてセオリー通りではないことというのはたくさんあるように思います。

**広商時代の小田選手
今だから話せる【大爆笑】こぼれ話**

小田監督に選手時代のことを聞きました。「選手時代の甲子園で、なにがなんでも勝ってやろうかという気持ちはなかつたのですか？」

プロ野球でも「ここはバッターが外国人だから初球はボールから入るべきでしょう」という解説者の言葉がよくありますが、私の中ではそういう発想はないですね。「じゃあ、初球ボールを投げたとしても、どこかでストライクは投げないといけないじゃないか?」「1球目たまたまボールを投げて、打ってくれてアウトになったらいいけど、どこかで投げないといけないのであれば、最初にストライクを投げておけ!」ただ、そのストライクを投げるときは勝負球という感覚です。

小田監督 ないないないないない!!! (即答) そういう余裕がなかったというか、高校時代は桑原監督との勝負だった。対戦相手に勝ちたいとかはなかったですね。相手に負けても監督だけには負けないと強く思っていました。

初球を狙っているところで初球を打たれた場合でも、結果ではなくて、チームにどういうコ

「夏の大会とかは負けたらどうせ引退じゃん!」とっていました。(笑) 甲子園でピンチを迎えたときも、マウンドに集ったときも、「負けたら遊びに行こうや!」と言ってたくらいですから。(大爆笑) そうしたら下級生が「小田さん真面目に

やってください！僕らは負けたら練習なのですよ！」と言ってたなあ。。。 (大爆笑)

今だから話しますが、甲子園大会前日、夜の素振りをしているとき「1回戦はどうしても勝とう！」と話しました。ただ、それはなぜかと言うと、前年に1回戦で新発田農業高校に負けていたので、また今年も1回戦で負けたら「ボロカス言われるでえ〜」という話し合い。(大爆笑)

そして、3回戦の興南戦の前に「本気のミーティング」をしました。3回戦に勝てばベスト8。「ベスト8に入ったら国体に行かないといけないで」と。「国体行くとすると夏で終わらないよ！もう、これ以上(夏以降)桑原監督とは付き合えないで！」なんて。

そしたらまた、下級生が来て「ちゃんとやってください！」と言われて・・・

そんな雰囲気やっていましたね、現役時代は。

宮迫 意外や意外です！私は当時中学生で一生懸命テレビにかじりついて応援していたのですが、そんなミーティングや話し合いをしていたとは・・・実は、あの甲子園準優勝をみたときに自分も広島商業進学を決意したのですが(笑)

小田監督 それで決勝に進出して、ここまで来たら「絶対に優勝しようで！」と言ったら、逆にボロ負けしましたけどね。(笑)



宮迫 最後になりましたが小田監督の「夢」を

お聞かせ願えませんか？

小田監督 私も歳をとったんだと思うんだけど、欲、夢がないんだよね。(笑) 私はね、広商のときも一番練習が嫌いな選手だったんですよ。練習も一番先にあがっていたし、一番「要領がよかった選手」なんです。(爆笑) 高校野球にたいしても、そこまで強い思い入れはないんですよ。

宮迫 ご謙遜を・・・

小田監督 実は高校野球の監督をやりたいから教員になったわけではないのです。教員になった動機は「教員が楽でええかの〜」と思って!!!! (大爆笑)

宮迫 ええ?? そうなんですか?? とても意外です。

小田監督 本当は中学教員でもよかったんですよ。特別、高校野球にこだわりはなかったし、そして今でも特別な執着はないですよ。でも、執着があったらもう2、3回は甲子園にも行っているのかもしれないね(笑) 普通20年くらい教員をしていたら、別の仕事では生きてはいけなかもしれないけど、私はね、そんなことないかなと思うことがあるんだ。営業やれと言われてれば、営業もやるよ!!! (笑)

宮迫 本当ですか？

小田監督 ただね、ここにきて(この歳になって)練習が好きになった。(笑) 前は高校生が試験週間などで練習が休みになったら、出掛けたりもしていたんだけど、最近はそんなこともなくなった。以前は、練習の直前ギリギリに練習に顔を出したり、終わったらすぐさま帰ったりしていたけど、最近では、練習の1、2時間前に来て見たりしています。まあ、それくらい、やる事がなくなってきたとも言えるのかもしれないけど・・・ (大爆笑)

今が人生で一番まじめに練習をしているかもしれない!!! (大爆笑)

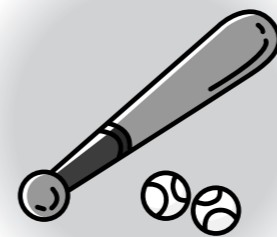
私の子供が今、中学3年生なんです。今の子

供は本当に変わってきていると感じます。昔みたいにはいなくなると自分の子供をみて実感している部分があります。私は選手の親たちとあまり関わりをもたないけど、年に一度だけ話す機会があって今年、保護者に言ったのは「若い頃は、親は一体どんな教育をしよるんな? 躰もせずに!」って思っていたと。ただ、我が息子をみてねえ。野球部の子供たちは、監督の前では直立不動で私の話を聞くんですよ。ただ家に帰って私が子供に話をしても、息子はソファーにふんぞりかえって話を聞く。それが現状ですと保護者の前で言ったんです。(大爆笑)

それがわかった上で、やっぱり子供に対する責任を感じるようになりました。親が言えないところは私が代弁して言わないといけないことがあると強く思うようになった。野球の指導方針は一切ブレてないですが、生徒に対する当たり方というのは大きく変わりましたね。まっ、一言で言えば、歳をとった。(大爆笑)

宮迫 夢ということから話がそれましたが、改めて、監督さんの夢というのは・・・

小田監督 そうですね、改めて言われると難しい感じがするけど、自分が甲子園に行きたいとか、そういうことは全くないんですよ。自分が監督として甲子園に行きたいということは、あったほうがいいのかもしれないけど、ないですね。ただ、一生懸命に頑張っている子供たちに「良い思い」をさせてやりたいとは強く思います。子供たちを喜ばせてやりたい。子供たちを支えている保護者の皆さんも喜ばせてあげたいとは強く思います。保護者の皆さんも相当に頑張っておられますからね。



宮迫 すばらしい夢ですね。小田監督の強い思いが伝わってきます。

聞き手が不慣れなため、いろいろと話が飛んでしまったりいたしました。当初予定していた時間を随分過ぎてしまいました。まだまだお聞きしたいこともあるのですが時間の都合もありますので、このあたりで終了させていただきます。

今日は、今まで知り得なかった小田監督の理論や思い、考え方はもとよりお人柄に関する話もたくさんお聞かせいただくことができました。朝早くから師匠桑原広島商業との練習試合2試合をしたあと、貴重なお時間をいただきましてありがとうございます。

今後も小田監督さんの「夢」が毎年成就するように祈念いたしております。

今後、ますますのご活躍をお祈りいたします。今日は大変ありがとうございました。

第83回(2011年)選抜高校野球大会の選考会が2011年1月28日に開催されます。

吉報よ届け!!!



インタビューを終えて

今回、小田監督には広島県柔道接骨師会広報部の趣旨をご理解いただき、大変お忙しい中、取材にご協力いただきました。本当にありがとうございました。また、取材前のアポイントをとる際、たくさんの関係者の方々にもご協力をいただきました。誌面上、不躰ではありますが、ご協力いただいたすべての方々にお礼を申し上げます。

実は今回の取材はとても緊張をして臨みました。面識もない小田監督がはたして取材を受けてくださるのか？ また受けてくださっても、ちゃんと取材ができるのか？ アポイントの電話をする際は、高校時代の先輩に対する記憶もよみがえり、電話を持つ手が緊張で震え、取材日も緊張で足が震えていました。

ただ、取材を開始する前に小田監督が「緊張なくていいよ」と声をかけてくださり、少し胸のつかえがとれた感じがいたしました。取材開始をしてからも、慣れないことゆえ取材の要領が悪かったと思うのですが、小田監督には懇切丁寧にご回答いただきました。おかげさまで、意外な話、びっくりする裏話など盛りだくさんで、マスコミで報道されることのないであろう

小田監督の違う一面も皆さんにはお伝えできたのではないかと考えています。大変に有意義な時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

総合技術高等学校が今春の選抜甲子園大会に出場ができたあかつきには広島県柔道接骨師会としてもしっかりと「応援」をしていきましょう！

また、甲子園大会だけでなく、今後とも「広島の高校野球界の公立高校の星」として小田監督率いる総合技術高等学校に目を向けて応援していきましょう！

